大城光正・吉田和彦著

『印欧アナトリア諸語概説』

大学書林, 1990年, xii+378頁, 8,240円

ŌSHIRO Terumasa and YOSHIDA Kazuhiko,
An Introduction to the Anatolian Languages
 Daigakushorin, 1990.

松 本 克 己^{*}
 MATSUMOTO Katsumi

「印欧アナトリア諸語」というのは、一般にはまだなじみのうすい名称かもしれない。印欧言語学の世界でも、この呼び方が定着したのはごく最近のことに属するからである。現在、「印欧アナトリア語派」という名でそこに含まれる言語は、三つの違った時代に属する三つの違った文字形態によって知られる。すなわち、まず第1は、紀元前2千年紀の楔型文字資料（そのほとんどは、かつてのヒッタイト帝国の首都ハットゥシャ〔現代のボغازキョイ〕出土の前17～13世紀に属する粘土板文書）によって知られる言語で、「ヒッタイト語」、「パラー語」、「楔形文字ルウィ語」がそれである。第2は、「ヒッタイト象形文字」と呼ばれる独特の文字によって書かれた、前10～8世紀に属する碑文資料によって知られる「象形文字ルウィ語」、そして、第3は、前1千年紀中ごろの、アルファベット系の文字で書かれた「リュディア語」、「リュキア語」、「ミリア語」などである。このうち、第1の言語群は、今世紀になってはじめてその資料が発見され、まず、フロズニーによるヒッタイト語の解読（1915～17）によって、これまでに知られないまったく新しい印欧語の一派として姿を現した。一方、アルファベットによる「リュキア語」および「ヒッタイト象形文字」による碑文資料は、前者は19世紀の前半から、後者は同じく前世紀の後半からその存在が知られ、小アジアの謎の言語、謎の民族として、多くの学者の関心を集め、その言語と文字の解明をめぐる、100年以上の長い研究の歴史をもっている。そして容易にその正体を明かさなかったこれらの言語が、楔型文字のヒッタイト資料、とりわけ「楔形文字ルウィ語」と関連づけられることによって、ようやくその実体を把握できるようになったのは、ごく近年のことに属する。現在、これらの言語が、印欧語の中の独自の一派を形作り、年代や文字形態の違いにもかかわらず、その内部できわめて親近な関係にあることは、もはや疑いのない事実である。しかも、

* 筑波大学教授 Professor, University of Tsukuba

ヒッタイト語をはじめとするこれらの言語は、これまでに知られる印欧諸言語の中で、年代的にもっとも古い資料を提供するというだけでなく、その特異なそしてある面ではきわめて古風な言語相によって、印欧言語学のさまざまな分野に新たな光を投ずることになった。これらの古いアナトリアの諸言語は、今や、印欧言語学者にとって最大の関心事となっているといっても言い過ぎではないであろう。しかし、ヒッタイト語を別にすれば、その多くは、資料的な制約と研究の特殊性のために、少数の専門家を除いて一般には近づき難い領域であったことは否めない。これまで研究の中心であったヨーロッパにおいても、これらの言語を総括的に取り扱った書物としては、それぞれの分野の専門家の寄稿になる B. Spuler (ed.), 1969: *Altkleinasiatische Sprachen* (Handbuch der Orientalistik, 11-1-2, 2), Leiden 以外に、まだ公刊されたものはない。

前置きが長くなったが、冒頭に掲げた書は、この分野の研究ではすでに国際的に知られたわが国の新進気鋭の二人の学者の手になるかなり高度な「概説」書である。扱われた言語は、ヒッタイト語、パラ語、楔形文字ルウィ語、象形文字ルウィ語、リュキア語、リュディア語の六つで、これは現段階である程度まとまった資料によって記述可能なこの語派のすべての言語を含んでいる。序文によれば、これらの言語の中で、ヒッタイト語が吉田氏、残りの5言語が大城氏によって担当されたという。

本書の構成は、アナトリア諸語を概観した序論に続いて、それぞれの言語が上記の順序で扱われ、言語ごとに、文字・音論と文法概要の他に、選ばれたテキストの抜粋が付される。たとえば、ヒッタイト語に関しては、後期ヒッタイト語のテキストから「ハットゥシリ3世の自叙伝」、古期ヒッタイト語を後期ヒッタイト語の時期に書き写したテキストの例として「太陽神への祈り」、「竜イルヤンカとの戦い」、そして古期ヒッタイト語のオリジナルのテキストとして「ヒッタイト法典」が選ばれ、ヒッタイト語の時代的な言語相の違いもある程度たどれるように工夫されている。またこれらのテキストは、楔型文字テキスト（ただし扱われたテキストの一部）、ローマ字に翻字されたテキスト、その日本語訳、そしてかなり詳しい語学的な「解説」が加わる。さらに、巻末には、「印欧アナトリア諸語比較資料」、「ヒッタイト王統表」、「アナトリア概要図」、各言語についての「参考文献」、および言語別の「グロッサリー」が付いて、学習者の便に供されている。

各言語に割り当てられたスペースは、もちろん限られているが、この限られたスペースの中に盛り込まれた文法概要と各テキストの注釈は、いずれも最新の研究成果を踏まえたもので、簡潔ではあるが、きわめて up-to-date な内容となっている。まず、ヒッタイト語についていえば、これまでこの言語を学習するために頼れる文法は、Friedrich, J., 1960: *Hethitisches Elementarbuch I (Kurzgefasste Grammatik)*, Heidelberg

しかなかったが、実はこの文法は、ヒッタイト学の現状ではすでに相当時代遅れになっている。というのは、これが出た60年代以降に、ヒッタイト文書の主として書体の研究を通じて、言語の時代区分が可能となり、現在では、「古期」、「中期」、「後期」というような年代差を考慮しないとヒッタイト語の適切な文法記述ができないことが判明したからである。Friedrich の文法には、このような区別がなされていないために、新・旧の語形がいわばごちゃ混ぜになり、記述に混乱が生じているのである。本書は、この点について最新の研究成果を十分に取り入れているので、とくに、名詞、動詞の形態論はすっきりと分かりやすいものになっている。著者は、さらに、この言語の印欧語的背景にも光を当て、ある程度比較言語学的な視点からの説明も加えている。これらの部分は、おそらくスペースの関係で、専門用語や比較文法の基礎知識に関する説明が必ずしも十分とはいえないために、初学者にはあるいは余分な負担になるかもしれないが、印欧比較文法の側からアプローチする学習者には十分役立つであろう。

ヒッタイト語の文法記述にとって、もっとも困難な分野は、依然として、楔型文字表記とその背後に隠された音韻の実体との関係で、ここには今もって未解決の問題が山積している。たとえば、「母音の重複表記」 *scriptio plena* の問題もその一つである。本書では、Friedrich 以来の手法に従って、一律に、母音の長音符号でこれを表しているが（たとえば、*e-es-ta>ēsta*, *hu-u-ma-an-da>hūmandā a-pa-a-as>apās*, など）、これが適切な転記法かどうか、難しい問題である。この重複表記は、おそらく長母音とは何の関係もなく、しかもそれぞれの語に関して、表記が常に一定しているわけでもない。従って、機械的にこの転記法を採用するとどうしても無理が生ずる。長母音よりもむしろ語のアクセントと関連づける最近の解釈の方が有力であろうが、もしこれがアクセントを表すとすれば、あらゆる自立語は、原則として、必ず「アクセント核」があるはずであるから、理屈からいえば、すべての単語に必ず一箇所 *scriptio plena* が現れなければならないが、もちろんそうはなっていない。どういう条件のときにこの表記が現れるのか、依然として不明である。評者の経験では、これを長音符号で常に転写するやり方は、それを無視するやり方よりも、学習者にとっても、また言語学的観点からも、勝っているとは必ずしも思われない。ごく少数の、たとえば、*modal particle* の *ma-an* と接続詞の *ma-a-an* などの場合だけ、別の語として説明を加えれば済むように思う。なお、ヒッタイト語には、音韻的に母音の長短が区別されていたという証拠はまったくないのであるから、本書の p. 29にヒッタイト語の母音体系として、短母音と長母音の4母音の体系を並べ、あたかもその区別が自明であるかのように記述されているのは、誤解を招きやすい。次に、ヒッタイト語の表記で学習者を悩ますのは、主として語末に現れる「無音」の *a* で、たとえば、*-za*, *-ta* などの文字が、*/tsa/*, */ta/* ではなく、

/ts/, /t/ を表す場合である。現状では、「無音」の a とそうでない a を首尾一貫して見分けることは不可能であるが、それが名詞や動詞のパラダイムの中ではっきりしている場合、たとえば、p. 36 の奪格の āssawaza, p. 37 の kūzza, hūmanza などではそれぞれ、/assawats/, /kutts/, /humants/ であることを何らかの形で示した方が、初学者には分かりやすいであろう。同様に、動詞の活用形で、たとえば、p. 46 の (e-) es-「である」の過去の単数 2 人称の e-es-ta と 3 人称の e-es-ta も、おそらく前者は /esta/, 後者は /est/ である。

なお、細かい点についていえば、p. 75 の DINGIR^{MES}-aš には、siun-as という読みを添えた方がよく、その下の attaš-meš-naš-za の -meš は -miš, p. 82 *mēh₂ur は、*mēh₂ur とすべきである。また、p. 92 で、ヒッタイト語の動詞 ija-「する」(＝ルウィ語 aja-) が印欧語の *jeh₁- と関連づけられているが、この動詞の語源については、ヒッタイト学の初期から多くの議論があり、一部の学者によって提起されたこの解釈は、けっして一般に支持されているわけではない。*jeh₁- は、ギリシア語とラテン語では共に「投げる」という意味で、意味的にもまたルウィ語との音韻対応の面でも困難がある。ついでながら、本書で印欧語の「喉音」は、h₁, h₂, h₃ のように h で表されているが、一方で、印欧語の「有気音」が bh, dh, gh 等で表されるため、その h と紛らわしい。たとえば、*dheh₁-, *deh₃- のゼロ階梯がそれぞれ *dhh₁-, *dh₃- となってしまう、数字を省くと完全に混同が起こる。むしろ、これまでの慣行通り、H の方がよいのではなかろうか。

ヒッタイト語以外の言語については、Friedrich の文法書のような標準的な文法はまだひとつも書かれていない。その意味でも、本書に提示されたそれぞれの文法概要は貴重である。とくにルウィ語の場合は、大城氏がとりわけこの言語の専門家であるだけに、限られたスペースの中で、最新の研究に裏付けられた記述が示されている。たとえば、ルウィ語の中性名詞に現れる -sa は、これまで正体不明とされてきたものであるが、これを単数主・対格の語尾として位置づけたのは、氏によって初めて提起された新しいしかし有力な解釈である。楔形文字ルウィ語の文法についてこれまで利用できたのは、Otten, H., 1953: *Zur grammatikalischen und lexikalischen Bestimmung des Luwischen* (Berlin: Akademie Verlag) と Laroche, E., 1959: *Dictionnaire de la langue louvite* (Paris: Adrien-Maisonneuve) の中の簡単な概要ぐらいしかなく、どちらもルウィ語研究の現状からすれば時代遅れとなっていた。本書の記述は、その不足を十分に補う役割を果たすであろう。また象形文字ルウィ語の場合は、Hawkins/Morpurgo-Davies/Neumann, 1974: *Hittite hieroglyphs and Luwian: New evidence for connection*, Göttingen によって、この文字のいくつかの基本的な音節文字の音価

について従来とは違った新しい解釈が提起されて以来、この言語の研究は新しい段階に入ったわけで、たとえば、Meriggi, E., 1965-75: *Manuale di eteo geroglifico*, I-II は、公刊された当時、これまでのヒッタイト象形文字言語研究を集大成したもっとも標準的な概説書になるかと見られたが、これがそのままの形では使えなくなり、それに代わる文法もテキストも現在のところ、まだ公刊されたものはない。従って、象形文字ルウィ語に関するかぎり、本書の全部で35頁の中に盛り込まれた概要は、この分野の研究の最新・最高の水準を反映して他の追従を許さないといっても過言でないであろう。とくに、この言語の抜粋テキストは、オリジナルの象形文字テキストとそのローマ字転写が完全な形で示されているので、このきわめて特異な文字と言語に、専門家でなくても容易に近づくことができる。これも本書の得難い利点のひとつといえよう。

ルウィ語と並んで、最近のアナトリア言語学でめざましい発達を遂げたのは、リュキア語の研究で、ここでは1974年フランス考古学隊によるレートーオン出土のリュキア語、ギリシア語、アラム語の3言語併用碑文の発見が重要な契機となった(拙論:「クサントスのレートーオン出土の3言語併用碑文とリュキア語研究の現状」『オリエント』26, 1983参照)。それ以後の新しい研究の成果は、本書でももちろん十分に生かされ、上記碑文のかなりの部分がテキストとして選ばれ、一部新しい解釈も示されている。また、従来「リュキア語B」と称されてきたリュキア語碑文のなかの一部の資料だけによって知られる言語が、「ミリア語」の名で、ルウィ系の別言語として扱われているのも適切な処置で、この言語の特徴については、リュキア語文法の記述中に随時触れられている。

なお、これ以外の言語の記述に関して、やはり細部の点について触れると、パラ語文法の中で、p. 146 にpāpaz「父」、ānnaz「母」について、その形を「単数・主格形」とだけして、その-zに関して一言も触れていないのは、学習者を戸惑わせはしないか。この言語の単数・主格語尾は文法概要では、-s とだけ示されてあるからである。パラ語におけるこのようなs とzの表記上の「交替」ないし「動揺」(?)は、他にも例があり、これが純粹に音韻的現象か他に何か理由があるのか、評者にも実は判断がつかない。Kammenhuber 1959: 'Esquisse de grammaire palaite', p. 29 では、この「交替」をパラ語に独特な音現象と見ているようであるが、確実なことは分らない。いずれにしても、-z が主格語尾 -s の何らかの変異形であることに触れた方がよかったであろう。また、リュディア語の動詞活用形で、3人称の過去形に現れる -l という語尾に関して、p. 251 および序論の p. 8 で、印欧語およびアナトリア祖語の*-nt からこれを導いているが、はたしてリュディア語で nt>l という音法則が成り立つのかどうか、それについての説明が何もないので、これは評者が感じた戸惑いである。これまで、リュディア語の -l については、スラヴ語の -l と関連づけて一種の動名詞ないし

形容詞語尾起源とする解釈なども出されていたが、評者の知るかぎり、これについてはっきりした結論は、まだ出ていないように思われる。

細部について触れるべき点はまだ残されているが、資料的に限られたこのような言語の場合、すべてが解明し尽くされるというようなことは、もとより望むべくもない。いづれにせよ、目下の印欧言語学でもっとも注目を浴びながら、一般には容易に近づき難いこれらの言語の概説が、この学問の最先端の成果を踏まえて、このような形でまとめられ公刊されたことは、単にわが国の印欧学、オリエント学にとってだけでなく、この学問の国際的な視野からみても、画期的な出来事といってよく、この領域の研究者、学習者にとって、かけがえのない手引き書として今後大いに役立つであろう。また最後に、われわれは、両著者の貴重な労作に対してだけでなく、このような特殊な言語を扱ったかなり専門的な書物をあえて公刊された出版社の労をも大いに多としなければならない。